

4技能を総合的に育成する英語学習の指導 ～協同して取り組む活動を活かして～

英語科 俵石 正雄 板野 麻由美 内田 航介
山形 傑 David Astorga

1. 主題設定の理由

昨年度まで本校英語科では、①4技能のバランスが取れた授業、②協同して取り組む活動、「お互いの作品の推敲」活動を取り入れるという2点をメインに研究に取り組んできた。

授業では、「聞く」「読む」活動を中心にまずインプットがあり、その後、単元のまとめとして「話す」「書く」の活動でアウトプットをする(①)。その際、生徒同士でお互いの作文やスピーチなどを推敲しあい、その後に個人で自分の作品を再考して作りなおす。そして再度お互いに推敲する、という繰り返しを行い、協同して正確な表現を探していく(②)という取り組みをしてきた。

1年間この取り組みを行ってきて、課題が3つ見出された。

1つ目は、「推敲する」という活動に限定してしまったため、生徒たちにうまく動機づけをすることができなかった。課題意識がないと、推敲しているはずの時間が単に友だちとのおしゃべりの時間になってしまい、本来のねらい通りの効果が表れないこともあった。「もっと的確な英語表現を知りたい」「もっと相手に伝わる文を書きたい」「表現力を高めてすてきなスピーチがしたい」と思うことによって、交流も活発になるであろうが、そこまで意識づけできなかったのが実際である。

2つ目の課題は、教師の指示が日本語に偏り、生徒の「聞く」活動と「話す」活動の機会が限られた授業になってしまっていた。その理由は、この取り組みが昨年度初めてののものであったため活動の趣旨や内容を細かく伝える必要があったからだ。できるだけコミュニカティブな授業を常に継続できるように、視覚的教材なども取り入れながら活動内容の指示も英語で行うことが課題となった。

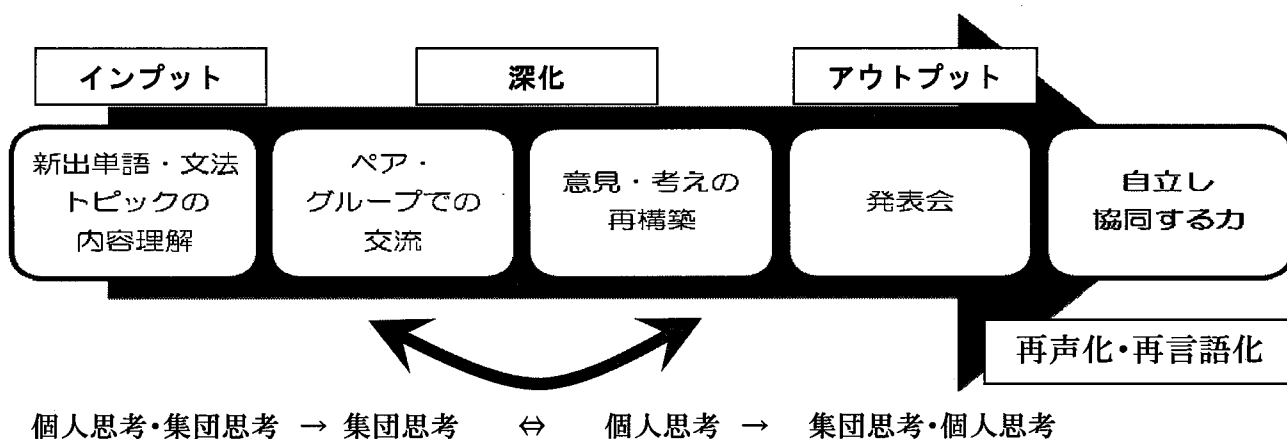
3つ目として、推敲活動では「文法事項の訂正」に偏っており、内容面にまであまり触れることができなかった点が挙げられる。これは、教師側は間違いの訂正だけではなく「表現としてより良いものを探す」ことを主眼にしていたにも関わらず、中学生が英語で作文したものには文法的誤りが比較的多いことから、生徒たちはまずその訂正から始まり、与えられた時間をすべてそれに費やしてしまうためであると考えられる。

上述の課題をふまえ、本年度の取り組みとして、「4技能を総合的に育成する英語学習の指導～協同して取り組む活動を活かして～」という研究主題を継承しつつ、お互いの作文やスピーチを「推敲する」ことに固執せず、単元のまとめとしての「話す」「書く」活動をする前に、何らかの形でペアもしくはグループで協同し、「深化」する活動をさらに取り入れることとした。本校英語科では「深化」とは、英語で聞いたり読んだりした情報について、仲間たちと意見を交流したり他者の発表を聞くことによって情報の内容をさらに深く理解したり、自分の最初に持った意見

や考えをさらに深める、コミュニケーションをよりスムーズにするためのことば選びととらえている。そして、「深化」を経て再構築された自分の意見や考えを、既習の語法を使って英語で相手に正確に伝えることを目標とし、それが本校の研究テーマである「自立し協同する力」につながると考えている。

このように、「推敲する」ことにこだわらないことで、単元ごとにもっともふさわしい活動を取り入れられるようになり、1つ目の課題である「生徒たちがより意欲的に活動できる場面設定の工夫」において、選択肢が広がることとなった。そして、2つ目の課題であった英語を使う機会の減少についてであるが、実際に思考に使用している言語は大半の生徒にとって母国語である日本語であろうが、「深化」するためのきっかけになる仲間との意見交流を英語で行うことで授業内の英語の使用頻度も高くなると考えられる。ただし、活動内容に対して生徒の英語力がまだ不十分だと考えられる場合は、教師が英語で指示を行うことで生徒の英語使用を補う。意見交流を繰り返し行うことで、内容も深まり、同時に文法事項の訂正だけに偏らない学習が行われると思われる。これは、3つ目の課題をクリアできるものと考えられる。

以上の点をふまえ、本年度の英語科の取り組みとして、1つの単元において単元のトピック(内容・文法事項)についてインプットを行った後、間に協同して取り組む「深化」の過程を経てアウトプットにつなげる流れを取り入れることとした。



2. 実践の概要

「英字新聞を読もう」 対 象 第3学年

単元設定の理由

英字新聞を中学校英語科の授業において活用することによって、英語科の4技能(読む・聞く・話す・書く)を効果的に身につけられる授業を展開することを目的とする。

教育における新聞の活用はNIE (Newspaper in Education=学校などで新聞を教材として活用すること)を始め、これまでも様々な場面で行われていて大きな成果をあげている。しかし、英字新聞を中学生に利用させることは、専門用語が多いという点で困難であった。そこで、見出しの書き方の特徴や、記事の新聞特有の表現方法などを指導することで読みの困難度が低下し、中学校でも実践できる可能性があると考えた。そして、この単元では自分で興味のある記事を探し、その記事について読み取ったり他者と意見交流をするなどして考えを深める活動を中心とした。

現在までの英字新聞を利用した授業の中での例を挙げると、昨年の授業において、英字新聞におけるタイトルは、未来を表す時には to 不定詞や ing 形を使用するということや、記事は時系列

ではなく新しい情報から順番に載せてある、などのルールを提示することで、生徒たちの読解しようとする意欲が高まったように思う。(NEW HORIZON English Course2)そして、今年度は4月に行った鹿児島への修学旅行について、「鹿児島新聞」として英字新聞を作成した。英字新聞にはまだ馴染みのなかったこともあり、タイトルや記事に関しては新聞らしくはなっていなかったが、レイアウトなどは本物の英字新聞を意識して作成した生徒も少なからずいた。

以上のことから、英字新聞に対する興味、関心は十分にあると考えられる。しかし、上でも述べたように、英字新聞を隅から隅まで熟読することは中学生にとってはあまりにも困難である。中学生にとっては、英字新聞を完璧に理解することよりも、情報を得ようとする態度を育てることが大切である。英字新聞の特徴をとらえ、自分が興味を持っている記事について読み、それについての考えを深めることだけでも十分に効果的であると考えられる。

さらに、指導法を工夫することによって、「読む」技能だけでなく、その他の3技能(聞く・話す・書く)を身につける活動にもつなげることができ、4技能をバランスよく活用できる、英語運用能力の向上に大いに役立つ授業になると考えられる。

英語の教科指導に限らず、日本の新聞における同様の記事の表し方と比較することで、時事問題への興味・関心も引き出すことができ、この研究は生徒たちの視野を広げようとする態度の育成にも非常に有効であると考えられる。

単元の目標

- 日本の新聞と比較するなどして英字新聞の特徴を理解することができる。
- 英字新聞の中から興味のある記事を探し、情報を正しく読み取ることができる。
- 英字新聞から情報を得て、他者とお互いに考えを深めようとする態度が身に付いている。

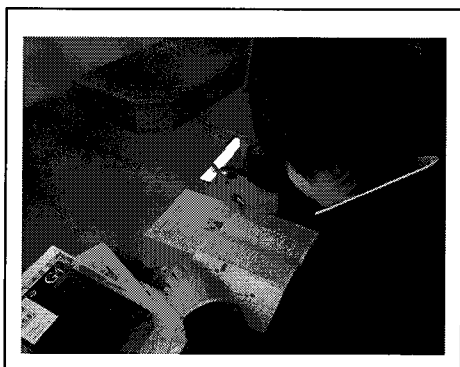
評価規準表

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
英字新聞から情報を得ようとし、他者と意見交流して相手の考えを理解し、同時に自らの考えをさらに深めようとする態度が身に付いている。	情報を、英語で話したり書いたりして正しく相手に伝えることができる。	英字新聞の中の自分が興味のある分野の記事を読み取り、情報を正しく得ることができる。	英字新聞と日本の新聞を比較し、英字新聞の特徴をとらえることができる。

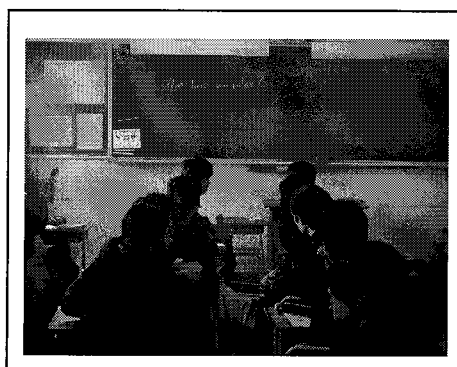
指導計画(全11時間)

第1次 英字新聞を読んで「気づく」 3時間

- ①英字新聞の構成を知る。TV番組紹介の記事を読み、作成する。
- ②写真を使った記事を読み、作成する。
- ③見出しを読み、記事の内容を予想する。



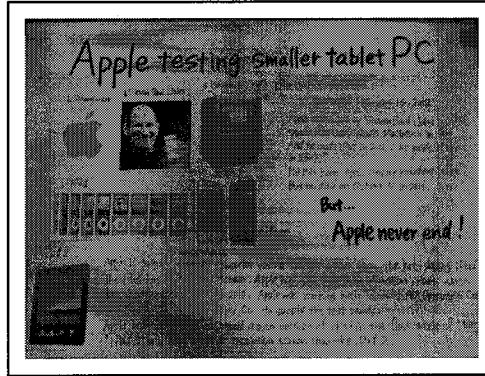
辞書を使って記事を読む生徒 (R)



記事に関するトピックについてペアで英語の会話 (L/S)

第2次 英字新聞を読んで「考える」 3時間 (記事を要約し、他者と考えを交流する)

- ①記事を読み、考えたことを友だちと英語で交流する。
- ②記事を読み、英語で要約する。
- ③少し長めの記事を、キーセンテンスを探しながら読み、見出しを考える。



グループで記事を読んだ感想を交流 (L/S) 読んだ記事を要約し、写真や補足を加える (W)

第3次 英語で情報を「伝える」 5時間

- ①新聞記事からニュース番組を作成する。グループで番組作成の計画用紙(資料①)を作成。
- ②～④グループで役割分担し、番組作成のための撮影、編集をする。
- ⑤発表をし、感想を交流する。

資料①

Plan for the news program		Sample	
Contents	Scene	Music / Voice	Tools
Opening	Title movie	Hodo Station	IC Recorder
Greetings	Anchor(Itano) is talking in the studio	Good evening. Welcome to the program. This is Mayumi Itano.	Video
Extinct birds rediscovered in Ogasawara Island	Anchor(Itano) is talking in the studio	Extinct birds rediscovered on Ogasawara Islands.	Video
	Picture of the bird	Bryan's shearwaters, rare seabirds formerly believed extinct worldwide, still survive in the remote Ogasawara Islands.	Bird picture file IC Recorder
	Picture of the map	The official Japanese name for the Bryan's shearwater is expected to be the "Ogasawara himemizunagidori." It measures 25 to 30 centimeters in length, with long tail feathers and blue legs. Bryan's Shearwaters were believed extinct because the last one ever identified was found in the Midway Islands in 1991, and the one before that was found in the same islands in 1963.	Map picture file IC Recorder
	Anchor(Itano) is talking in the studio	However, some birds that had found in the Ogasawara Islands have proved they are Bryan's Sharwaters. It is rare to rediscover birds once they are thought to have become extinct.	Video
Asada Mao settles for Silver	Anchor(Itano) is talking in the studio	Asada Mao settles for silver at the Four Continents Figure Skating Championships on Saturday. Here is an interview with Asada Mao.	Video
	Asada Mao(Yamagata) is talking in the studio	It is a shame about the triple axel downgrade but I think the fact that I went for it really is a plus for me. My goal at the world championships is to land a triple axel in both the short program and the free slate and iron out the creases in my free skate.	Video
	Anchor(Itano) is talking in the studio	Japan's Narumi Takahashi and Mervin Tran were fifth in the pairs, won by China's Sui Wenjing and Han Cong, who are two-time world junior champions. The ice dance was won by U.S. champions Meryl Davis and Charlie White.	Video
Greetings	Anchor(Itano) is talking in the studio	We hope you will enjoy the long weekend and we will see you next Tuesday.	Video
Ending	Title movie	Amanda	Music file

言語活動のマトリクス

コミュニケーション 單元	言語的コミュニケーション			非言語的コミュニケーション
	インプット	深化	アウトプット	ボディーランゲージ
英字新聞を 読もう	英字新聞と日本の新聞との違いに気づき、英字新聞の特徴をとらえる。	英字新聞を読み、他者と交流して考えを深める。	英字新聞から得た情報を、英語を使って正しく相手に伝える。	英字新聞から得た情報を伝えるために有効な方法(映像、画像、ジェスチャーなど)を使用する。

英字新聞の授業を受けて アンケート結果

1. 英字新聞の授業を振り返って、英語活動（聞く、話す、読む、書く）をすべて練習できたと思いますか。

はい→83.2% いいえ→16.8%

※4技能をバランスよく指導する
と言っても、ただ単に聞く、話す、
読む、書く機会を組み込むだけでは

生徒たちは達成感を得られないようだ。ふさわしい場面設定を考えつつ、実用的な活動が要求されている。

生徒が話す英語よりも、本物の英語のニュース番組なども聞いてみたかった。
要約する機会はあったが、自分の考えを書く機会はあまりなかった。

2. ペアやグループの活動で、自分の意見をきちんと相手に伝え、話し合いに積極的に参加できましたか。

はい→91.6% いいえ→8.4%

※グループのメンバー分けについても工夫が必要である。

グループのメンバーによっては、積極的に参加していない生徒もいた。

【英語力についての感想】

- 難しい単語が多くて読解が大変だったが、わからない単語を推測しながら読む力がついた。
- 時事英語を知ることができた。 ○教科書とは違う、生きた英語に触れられた気がする。

【グループ活動についての感想】

- みんなの意見をきくとすごく参考になったし、協力してできたから良かった。
- 自分たちの個性を発揮することができる授業だった。

3. 成果と課題

単元ごとの学習において、4技能(Communication skill)を全体としてバランスよく指導するよう工夫してきた。今年度はとりわけ、「深化」の段階でペアあるいはグループでの教え合いや共感する場面である自立・協同活動(Communicative competence)を取り入れることで、1人だけの学習よりも、他者の意見を聞くことで自分の意見も深まりお互いにとってより学習効果が期待され、自立し協同する力が育まれると考えている。

しかし、この取り組みを通して以下の二点の課題が残された。

一つ目は、Communicative competence の評価について不十分であることである。自立しているか(自分の意見をきちんと相手に伝えられるか)や、協同しているか(ペアやグループで協力して活動しているか)についての評価が、教師の観察や生徒たちの感想に留まっていて、点数化など目に見える形での評価ができておらず、またそれについてのふさわしい評価方法も模索中である。

この課題の改善のための方法として、ポートフォリオによる振り返り活動を継続的に続けていくことが考えられ、今後実践する予定である。これまでの経過を教師が確認できることが大きな成果になるが、それと同時に生徒たち自身もこれまでの過程を振りかえることで、達成感を得ることができるであろう。

二つ目は、個人思考と集団思考の繰り返しによるコミュニケーションを重視した授業を目指しているが、クラス内でのコミュニケーションに留まっていることである。親しい者同士間であれば言葉や表現力が不十分でも伝わってしまうが、それだけではなく、背景知識の異なる集団とも円滑にコミュニケーションを図ることができる人材を育てることが必要である。そのために、ICTの活用などを含め、学校で得た知識を何らかの形で社会に還元できるような授業の展開を今後の目標とする。